

## 特集に当って

豊橋技術科学大学 太田 敏澄

情報技術は、従来より、経営の情報処理能力の向上を通じて、企業の収益力向上に貢献してきた。最近の情報技術は、人工知能やエキスパート・システムなどの形で、知的な問題解決にとりくんでいる。このような情報技術の展開は、経営に新たな機会をもたらしている。

新技術の開発、新製品の開発、経営戦略の展開などは、情報創造活動である。経営における情報創造活動は、最近ますます重要な活動となっている。これらの領域で成果をあげるためには、組織の情報処理能力、情報創造能力の向上を図ることが課題となる。

組織知能は、組織の知的な問題解決能力である。この能力は、人間知能と機械知能(人工知能)とが絡み合った集積体に宿る。組織の情報処理能力、情報創造能力は、組織知能の現われである。

新たな情報技術は、組織の知的な問題解決能力に対して、どのような貢献をなし得るのであろうか。組織知能の向上を図りたい、あるいは組織知能を開発したいと考える人々は、どのように情報技術を利用したらよいのであろうか。

このような点を組織知能の観点から検討すべく、特集の課題としてとりあげた次第である。

この特集では、組織知能の開発あるいは支援に対して、情報技術の立場からの考察と、組織論の立場からの考察をとりあげた。情報技術の立場からの考察は、経営における問題解決のため、情報技術を適切な形で導入することによって、組織知能の向上をもたらそうとするものである。組織論の立場からの考察は、組織知能を解明するため、組織文化、組織学習、組織化、自己組織化といった組織現象との関連を追究することにより、組織知能の制度化や革新の議論を試みている。

組織知能の現われについては、松田武彦先生が、ちょうど1年前の本誌の特集「問題解決法としてのOR」において論じておられる。

松田武彦先生には、組織知能の基本的視座とその性質について、全体的な立場から組織知能論を論じていただ

いた。本稿は、当学会の研究部会「OR/MSとシステム・マネジメント」における先生のご講演をおまとめいただいたものである。

情報技術の支援という側面から、組織知能を向上させる経営のシステム化に関して、

山田善靖先生には、人間知能集積の集団的なレベルに注目し、集団的な意思決定に対する支援システムのあり方について論じていただいた。集団意思決定は、日本的経営の優れた特徴でもあり、興味深いテーマである。

丹羽清氏には、人間知能集積の個人的なレベル、特に専門家に注目し、人工知能やエキスパート・システムの活用のあり方について、論じていただいた。人間知能と機械知能の協同に関して、知識の伝承や知識移転は興味深いテーマである。

大森正明氏には、人間知能の集積体のレベルである経営システムに注目し、情報システムの革新について、実態に即した支援システムの開発について、論じていただいた。人間知能発揮のための柔軟なシステムづくりが論じられており、興味深い。

組織論の立場から、組織知能の性質に関して、渡辺慶和先生には、組織文化の側面からみた組織知能について論じていただいた。組織知能を組織レベルの概念装置とし、その諸相として組織学習と組織忘却の位置づけがなされ、組織文化の構造変化が論じられており、興味深い。

太田は、組織化・自己組織化の側面からみた組織知能について論じた。自己生成的システムと他者生成的システムの対比にもとづいて、組織知能を特徴づける自己生成的連鎖の抽出を試みた。

以上の議論は、いずれも組織知能の概念や、組織知能高度化の方策に関する知見のまとめであり、経営システムの改善や開発に貢献するものと考えられる。今後、組織知能に関する研究が、ORやAIと社会科学的研究領域との協同研究を盛んにする契機となることを願っている。